

中学校武道必修化について空手道の問題点

泉 賢司

Problem of Karate-do for the Bdou as a required subject at junior high school

Kenshi Izumi

はじめに

平成20年3月に中学校学習指導要領が改正され、平成24（2013）年度から中学校教育において、「保健体育」の第1学年及び第2学年で体育分野の7領域（運動と体育理論）の一つとして、男女ともに必修で学ぶことになりました。第3学年では「球技」との選択必修である。

これまでも教科体育で選択科目として中学校、高等学校で指導されてきた。しかし、必修化にともない、全国の中学校1万900校で様々な課題が出てきている。その一つに、全国の中学校に武道を専門に指導する教師が少ないということである。特に空手道の場合剣道や柔道の指導者と比べて人員が少ない。しかし、T・T方式とって、2回に1回は道場の先生や専門の指導者を呼んで、協力しながらやっていく方法も考えているらしい。しかしこのことが、空手道にとっては問題でやっかいなことであると考えられる。

中学校では転勤もあるだろうし、一人の先生が三年間通して教えられると云う保証はない、剣道や柔道なら、担任が代わっても同じ方法で指導することができるが、空手道の場合いそうは行かない。

一つは、4つの流派があることで形や基本が違うという問題点。

二つめは、子供の時から一つの流派をやってきて、中学生になったら違う流派に変わったなどの問題点。

三つめは、級とか段ついてである、勿論中学校で始めて段を取ることは難しいと思うが、級を取ることは出来ると思うし、それが励みとなって進んでいく子供もいるだろうと考え、これも問題点の一つである。

剣道や柔道や弓道やなぎなたは、一つの連盟で統率され、又、技法や心法がしっかり出来上がっていますし、級や段もなんの問題もないが、空手道は、剣道や柔道に比べて歴史が浅すぎて、剣道や柔道みたいには行きません。これらの問題点をどう解消していくかがこれからの課題のように思います。勿論、全日本空手道連盟はあり、公

認段位は連盟が出していますが、それに加盟する4大流派も級や段を出す事が出来ます。

武道には生涯教育という理念もある。武道は、若い時だけのものではなく、年をとってからでも技量をますます深めていくことが出来る。強さだけでなく、深いものがある。

生活の中で伝統的なものに触れる機会が少なくなっている現在、武道という日本の伝統的なものに触れるよい機会になると思うし、空手道の歴史、4大流派、問題点も考えながらこのことについて考察したいと思います。

空手道沖繩の歴史

もともと空手道は、沖繩を中心として発展しながら本土に伝わってきた。

沖繩で生まれたかどうかは、いろいろな説があるが、元々沖繩は、中国との交流が1392年頃から始まっている。沖繩にはもともと(琉球方言で手のことをティー)という武術があったといわれている。そこに中国拳法を取り入れながら、沖繩独自の発展を遂げてきたものだと考えられる。ところが、当時の沖繩の人達は、これを秘密裡に稽古を行っていたために、その形態はストレートには陽の目を見ることなく、舞踏としての形のみが伝えられ、徒手空拳による「一拳必殺」の強い力を要求する格闘技としては、異様な形態で伝授されてきた。呼び名も次のように変わってきた。

15～18世紀	手(ティー)
19世紀	手(ティー)唐手(トゥーデー)
1901年(明治34)	唐手(からて)
1929年(昭和4年)	空手(道)
1970年～	カラテ、 KARATE

手(ティー)の時代

古くは16世紀、京阿波根実基(きょうあはごんじつき)が「空手」にて相手の股間を打ち砕いたとの記述が正史「球揚」にあり、これは唐手以前の素手格闘術であったと考えられているが、その実態ははっきりとしない。また、17世紀の武術家の名前が何人も伝えられているが、彼らがいかなる格闘技をしていたか、その実態は明らかではない。明確に、手(ティー)の使い手として、多くの武人の名が挙がるのは18世紀に入ってからである。西平親方、具志川親方、僧侶通信、波喜敷親雲上、葵世昌、真壁朝顕などの名が知られている。また、土佐藩の儒学者・戸部良熙えんが、土佐に漂着した琉球士族より聴取して記した「大島筆記」(1776年)の中に、先年来流した公相君が組合術という名の武術を披露したとの記述があることが知られている。この公相君とは、1756年に訪れた冊封使節の中の侍従武官だっただのではないかと見られており、空手の起源をこの公

相君シャンクーの来琉に求める説もある。しかしこれは、1762年、首里赤田の「潮平親雲上」という人が語ったものを、戸部良熙が実録したものだともいわれている、空手の資料としては一番古いものとされている。しかしその前にも(1683)年に「汪楫ワンシユ」という中国人が来琉していますが、弟子と演武したのは公相君だったのではないか？推測の域を出てない。

唐手(トゥーデー) (からて)の時代

1756年の尚穆王時代ショウボクとすれば、当時、佐久川親雲上(1733年～1815年)は、23才で血気盛んな若者であっただろうと想像できる。唐手佐久川と松村宗混とのつながりは、はっきりした資料はみつからないが、佐久川は、現代琉球古武道の中に伝承されている「佐久川の混」を後生に残しています。また、松村宗混が14～15才の頃佐久川親雲上に師事したという説もあります。史的にはさだかではありませんが、唐手佐久川の系譜上の影響を受けたことは推測できると思います。

そのような影響を受けたと思われる松村築登之親雲上宗混(1809年～1890年)は、首里山川の士族の出身であり、琉球王府の役職にありました。出生のついても1798年説や、1809年説がありますが、「唐手佐久川」に師事したという見解に立つなら1897～1898年が妥当じゃないかという説もありますが、これもさだかではありません。通称「松村のタンメー」とか「武士松村」とか言われ、その名をとどろかせており、1960年1月13日の「沖縄タイムス(伝説のある場所)」に於いて、希代の空手の達人と題して、松村宗混のエピソードにふれている。その中に、「1827年中山第17代の尚灝王が、薩摩、中国、西洋と三方からの圧力に耐えかね気遣いを装って王位を退いた時、王の守護役として浦添村港川部落の別荘に移って来た頃は、まだ若かったというから、彼にまつわる話しも、数々真実なものが多いようだ」とあります。

さらに井上秀雄氏は「松村宗混とその弟子たち」の中で、「築登之親雲上」には譜代家と新参の二種あって、譜代家は、元来は士分、新参は平民から成り立ったものである。松村は士族であるから譜代家の築登之親雲上である」と述べている。

宗混は、92才でその天命を全うしたと言われていますが、尚灝王の守護役を振り出しに、のちの尚育、尚泰の三代にもわたる王の側近として明治維新まで仕えたといわれています。又、士族の登竜門であった「科擧」にも合格し、遣貢使として2回中国へ渡航している。この時に中国武術を学んだのではないのかと言われていいる。

中国では宗混のみに秘伝とされた技法が伝授され、宗混の腕前を推察する記述が中国に残っている。中国武術の系譜雑誌に「日本剣術は、静止して動かず、一瞬電光の間に勝負を決する恐ろしい刀法である。(中略)かって、北京にやってきた琉球人の中に日本剣術を使う者がいたが、試合をして勝つものはいなかった」と記されている。

宗混の最後の弟子であった、桑江のタンメーが授かったと言われる巻物があります

が、1960年7月3日の沖縄タイムズ紙上に、「武士竹村の空手巻物」として掲載されたその全文を紹介します。

「武術稽古の真味を志らずんば、あるべからず。よって覚悟の程申しさとし候得可きと吟味致す可く候。」

文武共に其道三つあり。

文道に三つと申すは詞章の学、訓学の学、儒学の学と申し候。

詞章の学と申すは、組語言を綴しゅう文辞を造作して、科目爵録の計を求め候迄にて。訓学の学は経書の義理を見極み、人を教える而已の心得にて道に通じ、事に精入り申さず候。

右の両学は、只、文芸の誉を得候迄にて正当な学問とは申し難き候。

儒者の学は道に通じて者を格知を取り、意を誠にして心を正し、推て以て家を奮え国を治め、天下を平らにするに至り是れ正当の学問にて儒者は是を学び候。

武道に三つとは、学士の武芸、各自の武芸、武道の武芸あり。学士の武芸は頭にて稽古の仕様相替り、成熟の心入り薄く、手(空手)の数がけ相習い計いて踊りの様にて戦守の法、まかり成らず婦人同人にて候。

各自の武芸は、実行これ無く方々去来致し勝つ事を計い申し致し、論争あるいは人を害し、あるいは身を傷い、依って身は親兄にも恥辱を過候。

武道の武芸は、放心致さず天を以て成熟致し、己が心を治めて敵人の乱を待ち、己が静を以て敵の嘩を待ち、敵の心を奪いて相勝候。

成熟相募り候て妙徴相発し、乱嘩もなし、忠孝の場に於いて猛虎の威、鷲鳥の早め自然と発して如何なる敵人も打ち修め候。

夫れ武は暴を禁じ兵を敢め、人を保ち、功を定め、民を安んじ衆を和し財を豊にす。是武の七徳と申し聖人も称美し呉候段書に相見得候。

さすれば文武の道、一理にて候間、学士各自の武芸は無用にして武道の武芸相嗜み候て、機を見て変に応じ以て物を鎮め可くをと存候間、右の心得にて稽古致し可く然り哉り存じ寄りし候付ば、無腹蔵申間所に希申し候。

五月 十三日 松村 武長

まさに、武道としての空手道の心理を表していると思います。

この、唐手佐久川や松村宗混の弟子達により、沖縄の三各地(首里、那覇、泊り)に空手が広がっていった。

首里手

首里手の代表的な弟子の一人が、拳聖と呼ばれた「糸洲 安恒」その人である。

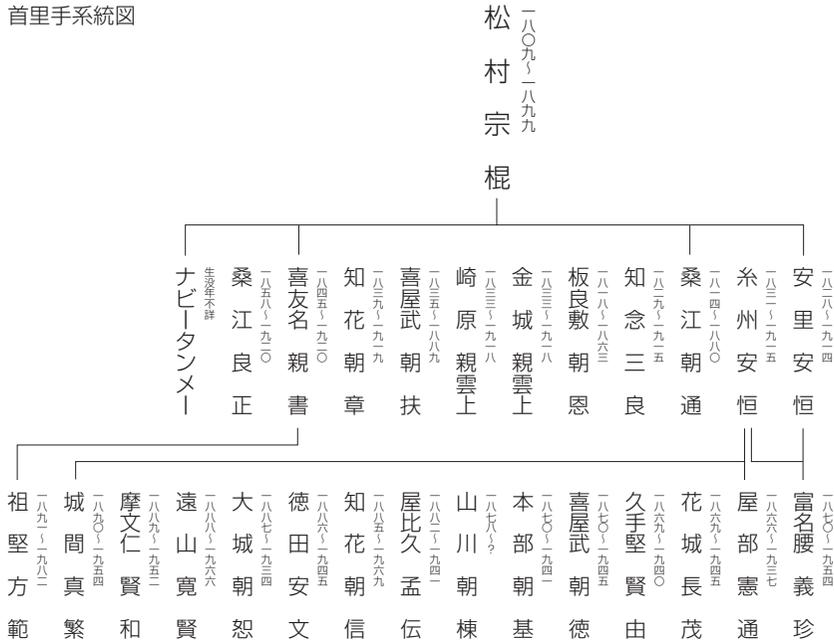
首里手の開祖的存在の糸洲安恒は、(1831~1915)首里の桃原村に生まれ、通称、糸

洲のタンメーと言われて、性格は柔和で温厚であったと云う、師の松村翁も、「お前に勝てるものは、この琉球にはいないだろう」と言わしめた人物であった。

氏の、体育的見地に立った空手の創造は、後の空手界に大きな影響を及ぼし、基本の型である、平安初段～平安五段の型は氏の改作の型で、前は「チャンナン」と呼ばれ、もともとは泊まりの中国人に習ったものを、体育的見地から改良したと言われている。

氏の指導理念は、肉体の鍛錬や、人間形成に主眼を置き、闘争を目的とした空手を事のほか嫌ったと言われ、弟子には、もっぱら体育的見地と修養という点に指導上の主眼を置いていたと言われている。

首里手系統図



糸洲安恒の弟子には、後に一流一派を創始した蒼々たる人物が輩出されている。その人物を紹介すると。

1、船越義珍

本土、特に関東を中心に空手啓蒙に尽力され、松濤館琉を立ちあげ、後に日本空手協会を設立し、最高師範となる。

2、摩文仁賢和

糸洲安恒の助手を務め、那覇手の東恩納寛量にも師事し、関西を中心に本土へ空手を紹介し、後に糸東琉を開く。

3、宮城長順

沖縄県警察所、師範学校の空手師範、後に本土へ行き立命館大学、京都帝大等を

歴任し、剛柔流を開く

4. 屋部憲通

陸軍少尉、師範学校に於ける糸洲安恒の助手、昭和2年ハワイに(外国)に初めて空手を紹介する。

5. 大城朝恕 師範学校空手師範

6. 喜屋武朝徳 沖縄県農林学校空手師範

7. 花城長茂 一中空手師範

8. 遠山寛賢 糸洲、板屋敷その他の先生に師事し、台湾拳法も修め本土に修道館を創設。

9. 中村茂 糸洲、花城、国吉に師事し、後に沖縄拳法会を設立。

この中から、日本の空手界の4代流派の3名が輩出されています。もう一つは和道流の大塚博紀師範ですが、この方だけが茨城県の出身で沖縄県出身ではないが、船越義珍や安里安恒の門をたたいている。

那覇手

那覇手(ナハデー)とは、琉球王国時代の商業街でもあった、現在的那覇市に発展してきた空手で、那覇の久米村(クニンダー)には、14世紀末、当時の明の福建省から「閩(びん)人三十六姓」と呼ばれる人々が移住してきた。これら三十六姓の末裔は、その後の琉球王国の歴史において、進貢使、通事(通訳)等の職につくなど、中国との外交、貿易においておおいに活躍した。那覇手は、これらの人や、あるいは琉球を訪れた中国人から中国拳法を学び、これを独自に発展させたものではないかと考えられている。

那覇手はその土地がらから百姓(平民)の手(テイー)とも言われ、士族が担い手だった首里手と対比される事もあるが、明治以前の那覇手は湖城(こぐすく)家など、閩人三十姓の末裔と言われる久米士族を中心に発展した。それゆえ、東恩納寛量以前の那覇手に限って言えば、百姓の手とも言えないのである。

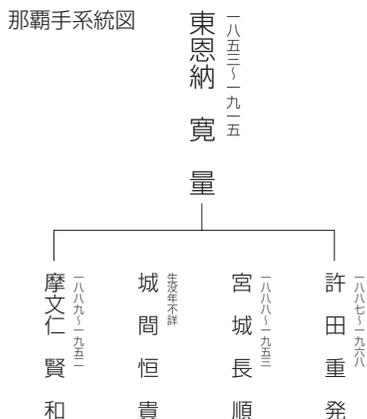
那覇手の起源ははっきりはしないが、湖城琉の伝承では、流祖、湖城親方が1665年頃に、中国において中国兵法を学んだ後、帰国して一族に伝授したとされる。これが事実なら、那覇手の起源は17世紀までさかのぼることになる。他の記録でも確認できるかぎりでは、湖城琉の四代目、湖城以正が中国の「イワァー(偉伯)」に師事したと言うのが最も古い伝承である。イワァーは、北京王宮の武官だったとも、冊封使つきの侍従武官だったともいわれるが、詳細は不明である。このイワァーから首里手の佐久川寛賀や松村宗混も学んだとされる。

湖城家からは、他にも湖城以幸(1836年-1907年)や湖城大禎(1838年-1917年)や湖城以昌(1848年-1910年)といった空手家が出ており、初期の那覇手は、湖城家の手

(ティー)と云っても過言ではない。

那覇手では、他に真栄蘭芳(1838年－1904年)や新垣世璋(1840年－1920年)などの空手家がよく知られており、彼らは1866年、冊封使節のための祝賀会で、セーサンや、スーパーリンペーなどの型を演武したと記録にのこっている。

新垣世璋の弟子には、現在の剛柔流、糸州流の基となる、那覇手の中興の祖と呼ばれる人物が東恩納寛量である。



那覇手の東恩納寛量は、(1853年3月10日－1915年)に那覇市西村に生まれた。寛量は17才頃から新垣世璋先生に師事し、その後、1876年23才の時、中国福建省福州へ渡り1874年～1877年の間空手の研鑽に努めた。

福州へ渡った寛量は、当時、福州一と云われた詠春白鶴拳(中国拳法)の達人、リュウリュウコウ老師に紹介された。リュウリュウコウは普段は無口で温厚な人柄だった。

寛量の武術に対する熱意を感じとった老師は、入門を許可し、毎日厳しい稽古が始まった。ところが始めは、毎日、補助運動と三戦(立ち形)の稽古だけだった。その後、厳しい稽古に耐え抜いた寛量を内弟子と認め本格的な武術を学ぶこととなった。そして、寛量はリュウリュウコウのトウオンナ(琉球の東恩納)と呼ばれ福州の武術界に名が知れ渡るようになった。

その後、福州を後に帰国し、門下生をたくさん輩出する中に、四大流派と呼ばれる剛柔流の開祖の宮城長順、糸東流の開祖の摩文賢和といわれる、今日の空手界の一角を担う偉人が出ている。

泊手

昔、泊は琉球王府の第二の貿易港であった。特に、中山王府が樹立された以降は、海外との玄関口であった為に、諸外国との文化交流が盛んで、泊の人達の中から、漢

学、芸能、音楽、武芸等、種々な分野の大家が誕生した。空手もその中の一つである。

泊手の中興の祖と云われた松村良興作(まつもら・こうさく)は、(1829年3月18日～1898年)、泊で出生した。唐名は雍唯寛(よういかん)、童名は樽金(たるがに)と呼ばれた。後生は、泊の武士松村茂良とよばれた。

茂良こと、興作が初めて空手を学んだのは、宇久嘉隆(うくかりゅう)1800年～1850年、庭先で三年間泊手の鍛錬型である内歩進(ナイハンチ)を学んだ。次の師は、照屋規箴(てるやしきしん)1804年～1864年の両師に学んだ。興作の非凡なる才能を見抜いた照屋は、庭先で行う稽古ではなく、人里離れた祖父の墓庭で、バツサイとワンシューを三年以上も習った。墓庭(聖現寺)は、俗に天久の寺とも云われて、現在の泊高校の敷地だったが、今はその北側の高台にある。照屋師匠が先祖の墓庭を選んだのは、人目を避けると云う目的もあったが、薩摩の役人が、不穏な動きがあるのではと神経をすりへらしていたので、墓庭が好都合であった。その後、興作は泊浜の洞窟、聖現寺の北側の丘の上に天井の低い、30平方メートルぐらいの平坦な洞窟(カーミヌヤー)に住む、謎の中国人からも学んだとも云われている。謎の中国人と云われる所以は、興作の技量が相当なものに達したのを見て、ある日、興作に、もはやこれ以上私が教えることは何もないから来なくても良いと告げた。数日後、洞窟を訪ねたら、師である謎の中国人はそこには居らず、その後も、行方はわからなかったと云われている。

師の照屋は、門弟に対して、隠忍自重し、みだりに動せず、好戦的におのれより先手を発してはならない。いわゆる「空手に先手なし」と、技を超越した精神面に重きを置き、「生半可な修練は自滅である」と戒め、「仁・義・礼・智・信」の五条をわきまえよと教えられた。

興作は、その当時、山田義恵(1835年～1905年)や親泊興寛(1827年～1905年)等と共に泊の三傑と称されていた。

興作の武術は、ハーリーヤーの山田義輝(1866年～1946年)、安富祖の久場興保(1870年～1942年)、泊中道の伊波興達(シーヌータンメー)(1873年～1928年)らに継承され、次々と泊の若者達に受けつがれていった。

松村良興作は、師、照屋の教えを守り、自分の為に技を用いる事無く、村民のために破邪顕正の道を歩み、「琉球一代の拳豪」、「泊手中興の祖」、「義烈武士松村茂良」などと一般大衆から敬慕され、生まれ育った泊村で明治33年11月69歳の生涯を閉じた。

空手道(からてどう)の時代

沖縄では、このように空手が三地域ごとに発展してきた。そして、それぞれ流派が生まれてきた。

その経緯は、(1895年、明治23年4月17日)～(1946年、昭和10月31日)に日本の武術、

武道の振興、教育、顕彰を目的として京都に設立された大日本武徳会に、1933年（昭和8年）空手として四つの流派が認められ、日本の武道として承認された。しかし、沖縄の一地方から発祥した唐手が大日本武徳会に認められた画期的な出来事だったが、唐手は「柔道、柔術」の一部門とされ、唐手の称号審査も柔道家が行うと云う屈辱的な条件を含んでいた。1929年（昭和4年）、船越義珍が師範を務めていた、慶応義塾大学唐手研究会が盤若心経の「空」の字を取って唐手を空手に改めるとした。1936年（昭和11年2月）に慶応義塾大学空手道部が発刊した「空手道集成」によれば、慶応唐手研究会創立5周年大会（1929年）昭和4年に「空手道の確立完成に向かって精進する事」を宣言したのに始まるが、船越義珍は「空手道教範」の中で、「唐手と空手」と題して「著者も旧慣にしたがって従来は唐手の字を用いて来たが、往々、支那拳法と同一視される事があり、沖縄の武術（からて）と云わんよりも日本の武術（からて）となっている今日唐手の字を当てる事は甚だ不見識、且つ、不適當と思われるので、世と推し移ると云う意味を以て今後は（唐）の字を廃して（空）の字に改める事にした。」と述べられている。

本土の空手は、大日本武徳会において柔道の一部門とされていたため、差別化のために取手「トウイテイ」と呼ばれた柔術的な技法を取り除き、打撃技法に変わった。又、棒術や、節棍術（ヌンチャク）、トンファー（トウイファー）、釵（サイ）などの武器術も取り除かれた。型の立ち方や拳動を変更し、型の名称も、新たに日本風の名称に改める流派もあった。更に沖縄では組み手が十分に伝承されなかったため、本土で新たな組み手を付加して、現在の空手道が誕生した。

1964年（昭和39年）には財団法人全日本空手道連盟が結成され、1969年（昭和44年）9月、全空連主催による伝統派（寸止め）ルールの「第1回全日本空手道選手権大会」が日本武道館で開催された。

このように発展してきた空手道ではあるが、柔道連盟や、剣道連盟のように一つになったものではなく、全空連は4大流派が集まって結成されている連盟である。そのためのしょうがいもある。

その4大流派である剛柔流、糸東流、松濤館流、和道流を説明します。

1. 剛柔流



剛柔流の開祖（宮城長順翁）

剛柔流の命名は、1929年（昭和4年）宮城長順の高弟・新里仁安により命名され、後に宮城がこれを追認したことから流派名として定着した。

この字句の源は、武備志の拳法八句に「法剛柔吞吐身隨時応変（法は剛柔を吞吐す身は隨時応変す）」に由来すると云われています。

宮城長順は1888年(明治21年4月25日)那覇にうまれる。17歳を過ぎた頃、那覇手の始祖、沖縄空手中興の祖と謳われた東恩納寛量に師事、その後、中国福建省に渡り、(1915年～1917年)さらに2年間空手の研鑽に励む。

大正期に入ると那覇に「沖縄唐手研究会」を設置した。さらに、1929年(昭和4年)の師範を歴任し、1930年、沖縄県体育協会空手部長。1934年、大日本武徳会沖縄支部常任委員となる。1934年、ハワイ「洋国時報社」に招かれる。1934年文部省より体育功労者として表彰をうける。1936年、中国上海市「精武体育会」において中国武術を学ぶ。さらに1937年(昭和12年)大日本武徳会より教士号を受けた。

宮城長順氏は琉球警察学校在任中、1953年10月8日(昭和28年)に65歳の生涯を閉じた。「空手道は心身を練り、健康をはかり、急に際して身を護る道である。」と宮城長順氏は空手道の本質をそう定義づけている。

武道とは生死を賭けた戦いであり、その技術を習得するためには、心身の調和的発達が必要であると考え、様々な鍛錬法を自らの厳しい修業の中から考案していった。

古来よりの精神修養法や健康法に近代的な視点を加え、身体面と健康増進に配慮した準備運動、体力増強のための器具を使った補助運動をいち早く取り入れ、合理的な練習体系を作り上げた。これらの準備運動は、現在でも変わる事なく行われている。

この事からも分かるように、那覇手と称された空手は、宮城長順氏の剛柔流をもって現在に伝えられていると云っても過言ではないだろう。

三戦(サンチン)三戦立ちに象徴される剛柔流の背骨とも云える型で、立ち方のみならず、伸ばす筋肉と曲げる筋肉を同時に動かせる事で任意の関節をロックし、外部からの衝撃に対する耐久力を高める技術全般の事をさす。

転掌(テンショウ)突きが繰り返し使われるサンチンに対して、ほとんどが受けの動作で構成されている珍しい型で、サンチン、テンショウは共に単純な動作の型であるが剛柔流の基本思想がここに行き着くと云っても過言ではないと思われる。高段者でも、常にここへ立ち返って確認するほどである。六機手、一転換手、一転掌と名が変わる。宮城長順先生考案の制定型である。

2. 糸東流



糸東流開祖(摩文仁賢和翁)

糸東流とは、首里手と那覇手の両方の流れを組む流派である。開祖は、摩文仁賢和で、糸洲安恒より首里手を、東恩納寛量より那覇手をそれぞれ学んだ。後に、糸洲安恒と東恩納寛量の頭文字をとり1934年(昭和9年)糸東流と称した。

1939年(昭和14年3月)に大日本武徳会へ糸東流を登録。同年7月「大日本空手道会」を発足。後に「日本空手道会」に改称。

氏は、1889年(明治22年)首里に生まれる。幼少の頃は、すこぶる虚弱であったらしい、中学校卒業後警察官になり、その後も、地方に隠れた首里手、那覇手以外の形、技法について模索し続け松村派、新垣派などの各派を修め、空手以外には琉球古武道の棒術、釵術を学んだ。それらの全ての技術と精神を融合、融和させたものが糸東流の空手道である。その技法上の特徴は、単に突き蹴りだけじゃなく、投げ、逆技と云った技術をも含み、まさに現在で云われる総合格闘技の様相を呈している。又、「守・破・離」(基本を忠実に・それを応用し・そこから独立する)と云う言葉に代表されるように、型という基本を守りながら、それを応用し、組み手と結びつけていくことによって作り上げられた分解組み手などに、その奥義までも修めることが出来るように体系づけられている。又、精神教育に重点を置いた開祖、摩文仁賢和は「君子の拳」を標榜し、円満な人格の形成・向上を目指した指導を行った。

首里手と那覇手を中心に、幅広い技術体系が確立されている流派であり、他の流派と比べても型の種類が多い。

特に、基本鍛錬として巻わらを使用した突き、蹴りの鍛錬や、砂利の上での正拳腕立て伏せなど、肉体鍛錬に重きを置いているところは実践的な流派と言える。

氏の著書には、「攻防自在護身術空手拳法」「攻防拳法空手道入門」があるが、攻防拳法空手道入門(昭和13年刊)より抜粋し紹介します。

日本精神の鍛錬場としての武道復興は一流一派の復旧を目指す偏見嫉視の狭見から出発したものであってはいけません。東亜の平和を確保すべき新日本、世界文明を指導すべき興国日本としての偉大なる新日本精神を鍛錬せんがために、出来得る限り優秀なる新要素、新栄養を摂取として総合的に研究し、発達せしむる意気と大理想がなければなりません。国民的修養としての新日本精神を武道大成のために、吾人はあくまで「自由にして強い」日本精神を発揮して、各種武術の総合的研究と発達を企画すべきであろうと思います。

「国民修養道としての武道復興」

摩文仁賢和

糸東流の全日本空手道連盟の指定形は次のとおりです。

- | | | |
|---------|----------|--------|
| * 第一指定形 | バツサイダイ | セイエンチン |
| * 第二指定形 | マツムラローハイ | ニーパイポ |

流祖、摩文仁賢和氏は、1952年5月(昭和27年)63歳の生涯を閉じた。

その後、多くの後継者を残しているが、二代目宗家として「摩文仁賢栄」氏が後を継いでいる。

3. 松濤館流



富名腰義珍師範

松濤館流の開祖は、富名越義珍、(後に船越と改める)である。氏は、1870年(明治3年10月10日)首里の山川の武家の家に生まれた。幼少の頃から身体が弱かったので、空手を習い、健康な身体を作ろうと思い、11歳の頃から当時の名人と謳われていた、首里手の安里安恒の門下になり、後に糸洲安恒の両先生について空手を修業された。

やがて、14歳の時、師範学校簡易科(臨時教員養成所)に入学され、18歳で那覇尋常小学校の代用教員となった。富名越氏は非常な苦学生で、上級校進学に必要な費用を貯える為に代用教員になった。その頃から氏は、指導の為の空手を本格的に学んでいった。

大正期に入ると、沖縄師範学校の武道教師や、沖縄尚武会会長に推挙される。大正5年京都武徳殿で、初めて空手を演武した。大正7年には「空手研究所」を設置し、技理一体の才覚を発揮する。

1936年(大正11年5月)文部省主催の第一回古武道(体育)博覧会に出場され、演武を披露した。その際、柔道の講道館館長・嘉納治五郎師範と初めて会われた。嘉納師範は、船越先生に、講道館での空手の講習を依頼し、先生も了承され約3ヶ月の間、高段者への指導を続けた。その間、小石川(現在JR水道橋)あたりにあった沖縄人の学生寮「明正塾」に移り、本格的な空手の普及活動を始められる事になる。そのかわり、1932年(大正11年)「琉球拳法唐手」、更に1935年(大正14年)「鍊胆護身唐手術」、1935年(昭和10年)「空手道教範」、1951年(昭和26年)「空手入門」、1956年(昭和31年)「空手道一路」などを著し、これらの著書に於いて空手道の沿革を説き、価値を考察し、指導理念を確立していかれた。

更に、船越先生が、空手道の発展の方向を大学に向けられたことは、先生の優れた卓見であったと云うべきであろう。

又、先生は、書道や、詩歌にも優れた才能を有され、「松濤」と云う雅号を有されて居られた。この「松濤」と云う雅号について、船越先生はつぎのように語っておられる。

「首里という町は城下町で、しかも山続きの城を中心に発展した関係か、琉球松とか南方系の樹林が随所にある。その中に虎尾山という深い松林がある。私は、いつとはなしにその虎尾山を散策する癖がついていた。時には半弦の月をいただき、時には満天の星空の下、微風にも敏感にそよぐ松籟の音はなんとも云えない神秘的な、そして例えようもなく、妙なる音楽のように感じられた。私にも三文詩人的なところがあつたのかもしれぬ。又、青年時代、代用教員として那覇にいた時のことである。奥の山公園という県下唯一の自然公園があつた。僅かに禅宗の寺のみがあり、人家がなく、

それだけに静かで、しかも太い松林があったので一人でよく杖をひいたものであった。その頃の空手修業は、ちょうど初期から中期に入った頃であったっせいか、空手道の精神的な面についても何かしら考えていたようである。だから静寂を楽しみ松籟の幽玄さに心惹かれ、松濤という言葉が頭の何処かにこびりついて、歌を作るときや漢詩を書くとき、ふと思いついた雅号が松濤だったと云う訳であります」と語っておられる。

先生は「空手道教範」の中で真の空手道とはと、五箇条を挙げて。

- (一) 人格完成に努めること。
- (二) 礼儀を重んずること。
- (三) 努力の精神を養うこと。
- (四) 血気の勇を戒めること。
- (五) 誠の道を守ること。

この五箇条の眼目こそが船越先生の精神であり、空手道の精神であると言えよう。

船越先生は、1947年(昭和22年)新宿区四谷に総本部道場(社団法人日本空手協会)を設立し、最高師範となり、それから10年後の1957年(昭和32年4月26日)に88歳の生涯を閉じた。

先生の教えは、今も、(故)中山正敏首席師範、(現)杉浦初久二首席師範に受け継がれ、脈々と続いている。

4. 和道流



大塚博紀師範

和道流空手は、初代、大塚博紀氏によって創始された。

流祖、大塚先生は、1892年(明治25年6月1日)に、茨城県下館市に生まれた。本名は、幸(こう)。博紀は後の武名として使われた。1897年(明治30年)6歳の頃、母方(サト)の大叔父、旧土浦藩の武術師範江橋長次郎の門に入り柔術の修行に励む。1905年(明治38年)茨城県立旧制下妻中学校に入学し、同校の剣術師範でもある中山辰三郎の道場入門、本格的な柔術修行(神道揚心流柔術)に入る。ちなみに、神道揚心流柔術とは、1864年(元治元年)松岡克之助尚周が揚心流を基礎とし、天神真揚流、揚心古流を併せ、直心影流剣術の合理性を取り入れて創始した。流祖、松岡克之助は、福岡県黒田藩、藩医の松岡道林の次男として生まれ、克之助が17歳の時、父、道林が江戸詰めとなった為に江戸に移り住み、幕府講武所にて揚心流柔術を学び、後に、浅草境内に道場を開設、この時の流名を神道揚心流柔術と改称した。二世は猪瀬元吉で、大塚博紀氏が学んだ三世の中山辰三郎行儀は、明治19年に、神道館道場入門し、松岡克之助尚周より直心影流剣術を学んだ後、

18歳の時、松岡の推薦で直心影流の箱守与三郎祐郷に入門。明治39年小野派一刀流の高野佐三郎師範から「剣道特業証書」をもらっている。

1910年(明治43年)早稲田大学専門部商業学科に入学。その後、天神真揚流、起倒流などの各道場を訪ね歩き、他流試合などを重ねながら柔術の研鑽に励む。

1912年(大正元年)父、徳次郎の死により、早稲田大学を中退し川崎銀行(現日本信託銀行)に勤務し、接骨術、活法の研究を始める。

1915年(大正4年)徴兵猶予撤廃に伴い水戸歩兵第二連隊に入隊。その後、大正9年、柔道整備会より整骨師の資格免許を授与される。

1921年(大正10年6月1日)満30歳の誕生日に中山辰三郎氏より、神道揚心流柔術の免許皆伝を允許され、同流第4世を継承する。

1922年(大正11年)松濤館流の開祖、船越義珍より空手道を学び始める。大正13年5月5日、皇居、済寧館道場において船越義珍と共に空手術の演武を公開する。

1928年(昭和3年)糸東流の開祖、摩文仁賢和氏を尋ねる。昭和4年、本部朝基氏を尋ね、空手の修行を重ね、日本古武道振興会を発足し、自らの空手道を和道流空手術として同会に入会する。

1934年(昭和9年)神田末広町に大日本空手道振興倶楽部と整骨院を併設した道場を開設した。

1838年(昭和13年)「大日本空手道振興倶楽部」を「大日本空手道振武会」と改称、そして同年5月大日本武徳会より「錬士号」を授与される。又、京都武徳殿で行われた「流祖祭」に出演、その際に「神州和道流空手術」として流名を登録した。この流名は、柳生新陰流の久保義八郎氏のアドバイスにより「神州」を取り「和道流」と改称し、以後、この名称で現在に至っている。1944年には、大日本武徳会より空手道の首席師範に任命されている。

1978年(昭和53年)和道流空手道連盟本部道場を東京練馬区に設立。

1982年(昭和57年1月29日)に90歳の生涯を閉じた。

和道流の特徴は、柔術の特徴が活かされた流派であり、捌き、流し、押し、引き、入り身、転身などの技法が見られるのが特徴で、相手の正面からぶつかるのではなく、自分の正中線を常に相手の攻撃目標から外させる、極めて合理的な技法で、現代の組み手試合に対応出来る稀有な例となっている。

型には、クーシャンク、ナイハンチ、セイシャン、チントウ、パッサイ、ニーセイシー、ワンシュー、ローハイ、ジッテ、ジオンなどがある。精神的な指導理念は、武の道は和の道であり、和の術であるとする。それは、天の道に背かず、地の理に逆らわず、人の道に悖らず、天地人の道理に和する事である。しかし、一度その技の発するところ、敵の攻撃を流し、往なし、且つ又それに乗れり、先で押さえ、後の先で制し、

先々の先で機(はかり)の発りを封じ、千変万化して和を恢復するまで止むる事はない。

四流派を簡単に紹介したが、技術的にはそれぞれ特徴があって、これは守って行かなければならないと思う。又、四流派とも指導理念は同じで、この事に重きを置いて指導していかなければ成らないと思う。

空手道には、その他、数多くの流派と云うか、自己流とも取れる物もある、しかしこれらを無くすことは出来ないし、発展途上と考えれば良いだろう。しかし、子供の頃から一流はをやってきて、中学生になって違う流派を学ばなければいけないようになった場合、どうすれば良いだろうか、指導する先生も困ってしまうと思います。しかし、これを解決する方法は今はありません、柔道や剣道みたいに流派のない一つのものにならないと出来ません。こういった問題を解決する方法として、礼法などを教えることも一つの方法だと思えます。又、空手道の原点である、護身術なども良いのではないかと思います。まずは現場の先生が苦勞しないような方法を考えて行かなければ成りません。

あとがき

武の本来の意味は「戈(武器)をもって、止(あし)で進むこと」つまり妨害をおかし、困難をきり開いて、荒々しく突き進むことを表している。もともと、武道は相手を倒すことを目的として生まれたものだが、時代と共に変わってきた。「戈を止める」などと言う意味は、鍛錬の中から生まれて来た精神的な教えで、自覚の一つの顕れであって、人間の最高度の体験に属する。佐藤通次博士は「武道の神髄」に、たとえば、他を殺すというのは、自他の対立に基づくから他覚の体験に入る。ところが、他を殺すということが一つの円環を成就して、己れ自身に復帰し、他を殺す己れ自身を殺すならば、ここに「殺」ということが超えられるであろう。「殺」を超える境地は「活かす」であるほかない。この道理を考えるなら、武の本義は「殺人刀」を転じて「活人剣」となすことである。

ところが人間は、同類、同族で敵どうしとなって、殺し合う境地をもつ。又、おのが個の立場を全として主張し、他を支配し、我意を貫き、我執に陥る能力をも得るにいたったのである。

後者の場合、人は他の猛獣以上に獐(さむらい)なる猛獣ぶりを発揮する。すなわち人間は、他のオノヅカラなる猛獣とは異なり、生物間の弱肉強食を、心の位の低落により、ミズカラ「人をそこない身をかばう禽獣」に陥ることで発揮するのである。友清歆真「古神道秘説」で説くごとく「この肉体というものも、尊いものであり神聖なものでありま

すが、道心が微弱になると、人身が獸身になりやすい]のである。

上の道心を高く強く発現せしめて、われ、他人共の獸身を人身に転換し、人にそなわる神性・仏性・明徳を輝かせ、人倫界に平和と秩序とをもたらすのが、「武の徳」なのであると云っている。

この事からも分かるように、「武道」は人を殺す技法を習うものではなく、自他共に、活かす方法を考える為の精神修養道なのである。

剣術家の山岡鉄舟は、剣術は、刀や竹刀で勝負を競うのではなく、事(わざ・技法)理(理合・心法)を一致させる努力の中で心を磨き、その鍛え上げた心の刀で相手と対峙するという「心外無刀(心の外に刀無し)」を唱え、「剣術は修養である」ということに集約された。後の先の理想を究めれば無刀の境地に至る。空手に先手なしという先人の教えは、このことではないのかと思う。

又、講道館柔道の創始者、嘉納治五郎は「柔道は心身の力を最も有効に使用する道である。その修行は攻撃防御の練習によって身体精神を鍛錬修養し、この道の神髄を会得する事である。そうして是れによって己を完成し、世を補益するのが柔道修行の究意の目的である」と講道館柔道修行の目的を明記している。

新渡戸稲造は、武道の本質を、「義」を中核とした「道徳体系」であると見ています。

空手道も武道である、我々指導者が武道の神髄を子供達に教えて行かなければ成らないと思っています、今では、空手道も競技化されポイントをいかにして取るかだけに専念して、勝つ事だけに目を奪われて、「道」や「武道精神」といった教えが足りないように思います。「甲陽軍艦」によれば、「声の変わる時分が人の善悪なり」と云っています。中学生といたら、ちょうどその頃にあたると思います。「学ぶ」の起源は「真似ぶ」であるといわれていますから、もともと教育の原点で、道をつく世界の教えは、みな見本を示し、それを真似ることを基本としています。指導する先生が真似されるように成ることが、武道を教える先生の誇りであると同時に武道としての正しい指導をしていただきたいと思っています。

〈 参考文献 〉

- 「武」の漢字「文」の漢字 — 藤堂明保
近代空手道の歴史を語る — 儀間真謹、藤原稜三
日本の武道 — 日本武道館
空手道教範 — 富名腰義診
沖縄の空手道 — 長嶺将真
武道秘伝書 — 吉田 豊
武道「過去・現在・未来」 — 田中 守
武道空手への招待 — 摩文仁賢榮
武道論十五講 — 杉山重利 編著
中学校保健体育における武道の指導法 — 国際武道大学附属武道スポーツ科学研究所
空手道集義 — 池田奉秀
インターネット